群青 ―丁寧に生きる、感謝と笑顔と。― Vol.62

Jun2nd2023

全日制高等学校に通うことの意味

６月に入った。新年度になり約２ヶ月が経ち、新しい環境にも慣れてきた頃だろう。そこで今回は、「全日制高校に通うことの意味」を考えてみたい。学校教育の第一の目的は、「人格の完成」にあるが、私が考える「全日制高校に通うことの意味」はたくさんあるが、今回は次の３点に絞って進めてみる。

１　知・徳・体の訓練：高等学校という教育機関である第一の目的が勉強であるのは今更言うまでもない。いろいろな教科・科目を勉強することにより知識を習得し、その中で人間としての振る舞い方を学び、体育で体の動かし方や体調の管理の仕方を学ぶことによって、自分の興味関心を探り、将来の道が見つかれば幸いだ。また的確な選択をする手段であり、将来を切り拓く手段でもある。高等学校での勉強により、そういう自らの成長を自らに期待していくことが第一の意味だということに異論がある人はあまりないように思う。しかしこれは通信制の学校でも同様で、どの高校に通っても同じことが言える。

２　毎日一定の時間に遅れずに通う訓練：本校は全日制普通科の高等学校だ。月曜日から金曜日まで、毎日６時間ずつの授業が組まれており、一定の出席日数をクリアしなければ、進級・卒業できない。地道に遅れずに通学することは、社会人の基本中の基本である通勤（リモートワークが増えたとはいえ）を当たり前のようにして実践する訓練になっている。朝一定の時間に起床し、準備を整えて、間に合うように家を出て、ちゃんと電車に乗ったり、自転車に乗ったりする。体調が悪くて休んだり、定刻に遅れそうであったりする時には、必ず上司や相手先に連絡しなければならないということも身につけることができる。このことは、「全日制高校に通うことの意味」として大切な要素だ。

３　多様な人との距離感を掴む訓練：人間は人と人との間で生きていく。誰にも関与せずに生きられる人はいない。食料一つ調達するにも誰かの支えが必要だからだ。全ての人が自分と価値観が同じということはあり得ない。気が合わない人も考え方が違う人もいる。できれば避けたい人もいるだろう。しかし、たまたま同じクラスになったことで協力して物事を進めなければならないことも出てくる。社会に出てからも同じだ。気が合う人とは、何をやっても気が置けなかったりするものだが、気が合わない人と一緒にいると、イライラしたりもする。そんな人に自分の大切な時間や心を持っていかれることはもったいない気がするだろう。全ての人と仲良くする必要はないが、協力すべきところで協力しなければ、自分が集団の中で居辛くなってしまう。そうならないような距離感のとり方を学びつつ、協力するところは協力するということを学ぶ絶好の場が学校だ。様々な行事が一つひとつのプロジェクトであり、そこへの参画の仕方を学ぶことができるのは、「全日制高校に通うことの意味」として大きい。

心遣い、思い遣り

『備前老人物語』という書物の中に戦国武将の織田信長がどういう人間に価値を認めているかということを記した箇所がある。「『惣じて人は、心と気をはたらかすをもって善しとする』あるとき信長が居室にいた。小姓をよんだ。よんだがべつに用はないといってさがらせた。また別の小姓をよんだ。これに対しても同様、用はないからさがれ、といった。さらに別の小姓をよび、おなじことをいった。その小姓はさがるときに、畳の上に塵が落ちているのに気づき、それをそっと袂（たもと）に入れてさがった。『あれが武辺というものだ。その心づかいしおらし』」（『覇王の家』司馬遼太郎）（※「小姓」：貴人のそばに仕え身の回りの雑用を務める少年、「武辺」：武道に関係する事柄、「しおらし」：感心である）

「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」という句を詠んだとかと言われる残忍さで知られる織田信長は、意外にも人の心遣い・気遣いを大切にしていた。物をやり取りする際、両手で行うといいということは５月の全校集会で話した。他にも、大谷翔平選手のように、グラウンドにごみが落ちていたら拾ってポケットに入れる。履物をきれいに揃える。相手を見送る際、見えなくなるまで見送る。これらは全て何秒もかからずにできる些細なことだ。その些細なことをやり続けることで、思いを伝える「思い遣り」の姿勢が培われていく。逆にこちらがそういう気持ちを持っていないと、相手の行いに気付かず失礼なことになる。例えば、相手が見送ってくれているのに、気付かずにそのまま行ってしまうことになってしまう。見えなくなりそうなときにもう一度振り返って一礼する。振り返った時に相手がもういなかったら、「ご存じないのだな」と笑って済ませばいい。大切なことは、知っていること、気付くことだ。

 文責：姫路別所高等学校長　篠原　歩